

一八八三年三月九日(金)

タクール、ドツキネーシヨル南神村にて新月の日に信者と共に——ラカールをゴパールのように思うこと

タクール、聖ラーマクリシユナは、ドツキネーシヨル南神寺院のご自分の部屋で、ラカール、校長、その他二、三の信者たちと共に坐っておられる。今日は金曜日、ファルグン月二十六日。キリスト暦一八八三年三月九日、マーズ月のアマザアシヤ新月。午前八、九時ころ。

新月の日にはタクールはいつも、宇宙の大実母の思いで心が高揚されていた。この御方はこんなふうにおっしゃる——神さまだけが実在で、他はみな非実在だ。大実母は、ご自分の大幻力マハマーヤ(大現象力)でみんなを虜とらにしていらつしやる。人間たちを見ると、まあ大方の者は縛られた魂だ。どんなにひどい目にあつたり悲しい思いをしても、それでもまだ女と金に執着している。トゲ草を食べて、ラクダは口から血をダラダラ流していても、それでもかまわずにラクダはそれを食べつづける。お産の時、女たちは、『ああ、ああ、もう二度と亭主のそばに行くものか』と言うが、またすぐ忘れてしまふ。見ろ、誰もあの御方を探しやしない。バイナップルの実をよけて、人は葉っぱばかり食べている」

信者「では、あの御方は、どうしてこういう世界にわれわれをお置きになるのでしょうか？」

「なぜこの世にいるのか？ 無私的行為を通じて心を清めるために」

聖ラーマクリシュナ「この世は仕事をする場所だ。仕事をつづけている間に智慧が生まれてくる。導師は、<sup>デル</sup>こういうことをしろ、ああいうことはするな」と教えて下さる。また、<sup>デル</sup>報いを求めないで

仕事をするように<sup>（原典註1）</sup>と注意して下さい。こうした仕事をやっているうちに、心の汚れがとれていく——  
良い医者にかかると、薬を飲みつづけているうちに病気が治っていくようなものだ。

どうしてあの御方は、この世から解放して下さいさるのだろうか？ 病気が治れば出して下さるよ。病院の女と金についての経験はもうたくさんだ」ということになったとき、許して出して下さるよ。病院の名簿に名がのっている間は、どうしても出られない。病気がすっかり治るまでは、<sup>せんせい</sup>医者様は放してくれない」

タクールは今日このごろ、ラカールに対してヤシヨーダー（クリシュナの養母）のようなやさしい愛情に溢れておられ、彼をずっと傍に留めておかれている。タクールとラカールの間柄は、ヤシヨーダーとゴパール（クリシュナの幼名）の仲である。母親のひざの上に小さい子がかき上がって坐るように、ラカールもタクールのひざにすっぴかりもたれかかって坐っている。まるで、これから乳でも吸おうかという様子だ。

（原典註1）君には定められた義務を行う権利しかない —— ギター 2・47 ——

〔聖ラーマクリシュナ、信者らと共にガンジス河の高潮を見物〕

タクールがこのようにして坐つていらつしやるころへ、一人の男が部屋に入つてきて、ガンジス河に高潮が押し寄せていることを知らせた。タクール、ラカール、校長はじめ皆は、高潮見物のため五聖樹パンチャバテイの杜に向かつて走りはじめた。五聖樹のところへ行つて、一同は高潮を見物した。時間は十時ころだった。一そうの小舟の様子をご覧になつて、タクールはおつしやる——「アレ、アレ、あの小さい舟どうなるかしら」

やがてタクールは、五聖樹の杜の道ばたに、校長やラカールたちといつしよにお坐りになつた。

聖ラーマクリシュナ、校長に向かつて——

「そうだ、高潮というのはどうして起ころのかねえ？」

校長は地面に簡単な絵をかいて、地球、太陽、月、重力、満潮、干潮、満月、新月、蝕などをタクールに分かつていただけるように、必死になつて説明した。

〔聖ラーマクリシュナの子供時代と小学校——ヨーギーは数や量、原因と結果のような有限で相對的なものを超えている〕

聖ラーマクリシュナ「なんだつて？ さつぱりわかりやしない。頭のなかグルグルまわるよ！ズキズキ痛くなつてきた！ほんとに、あんな速くにあるもののことを、いったいどうやって調べたのかな？」

ね、わたしは子供のころ、絵をかくのがうまかった。けれども、算術の時間になるとキョトンとしていたものさ！ ちょっとした勘定もできなかった」

やがてタクールは、ご自身の部屋に戻られた。壁にかけてあるヤシヨーダーの絵を見ながらおっしゃった。「この絵はどうも出来がよくないな、花売り娘でもしているようだ」

〔アダル・セン、はじめてタクールに会う——犠牲の話〕

昼食の後、タクールは少し横になって休まれた。アダルやその他のいろいろな信者たちが次々と部屋に入ってきて集まった。アダル・センは、今回はじめてタクールにお会いするのである。アダルはカルカッタのベネトラに家を持っている。彼は治安長官代理で、年のころは二十九か三十である。

〔心の境涯と非暴力・不殺生〕

アダルは聖ラーマクリシュナに向かって——

「先生、私は一つお聞きしたいことがございます。犠牲を捧げることはいいことなのですか？ これたしかに殺生をすることになりますか——」

聖ラーマクリシュナ「特別な場合には——お経にも書いてあるが——犠牲を捧げてもいい。定められたる時の犠牲は咎められない。たとえば、(満月又は新月から数えて)第八日目に牡山羊を一匹とか。だが、いつもはいけない。いまのわたしは、犠牲を見るのはとても辛くてできない。こんな気持ち

ちだから、大実母<sup>ママ</sup>に供えた肉でも食べられないんだよ。それだから、指の先でちよつとさわつて額につけることにしている——大実母<sup>ママ</sup>のご機嫌を損じないようにね。それから、すべての生き物のなかに——蟻<sup>アリ</sup>このなかにさえも——神さまが見える境地になることがある。こんなときには、何か生き物が死ぬのを見ても、体が壊れて無くなるだけだ、と思つては気が楽になる。そのもの自身、つまり魂は不滅だからね」(原典註)

〔アダルへの教訓——あまり考えすぎるな〕

「あまり考えすぎるのはよくないよ。大実母<sup>ママ</sup>の蓮華の御足を信仰していれば十分だ。あんまりあれこれ考えすぎると、なおわからなくなる。この辺の池の水は、上の方をすくえばとても澄んだ水が飲める。下の方に手をつつこむと水が濁ってしまう。だから、あの御方に信仰が持てるように祈りなさい。ドルヴァの信仰には欲があつた——王位をねらつて苦行したのだ。だが、ブラフラータのは無私で、報<sup>アヘトッキ・バクティ</sup>いを求めぬ信仰だつた」

信者「どんなふうにしたら、神をつかむことができるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「今言つた信仰によつてだ。だが、あの御方に圧力をかけなければいけない。会つてくれないなら、喉をナイフで切つて死んでやるぞ——という位に。こういうのを信仰のタマシ性というのだ」

信者「神は見る事ができるのですか？」

